

依頼文における終助詞「か」のイントネーション

小池 圭美

要 旨

本稿は、依頼文「ていただけませんか」と「ていただけませんかでしょうか」の「か」のイントネーションの実態を探るために、スクリプトの読み上げ実験を行った。対象者は日本語母語話者、中国語・韓国語を母語とする日本語学習者それぞれ男性10名日本語、女性10名である。それぞれの発話音声をDATで録音し、音声録聞見で分析した結果、「ていただけませんか」に関しては(1)日本語母語話者でも男女で差があり、男性は非上昇イントネーションが多く、女性は上昇イントネーションが多かった(2)学習者は男女で差が見られなかったが、中国語母語話者は非上昇イントネーションが多く韓国語母語話者は上昇イントネーションが多いことがわかった。また「ていただけませんかでしょうか」に関しては(1)日本語母語話者は全員非上昇イントネーションで発話していた(2)中国語母語話者は非上昇イントネーションで発話していたが、韓国語母語話者は上昇イントネーションが多いことがわかった。

[キーワード] 依頼文、上昇イントネーション、非上昇イントネーション、男女差、母語による差

1. はじめに

近年学習者の「多様化」に伴い、日本語教育のあり方が見直されてきている。串田他(1995, 40)によると、「従来の音声教育では、単音の発音やアクセントの『正確さ』を重視する一方、『流暢さ』を支えるイントネーションや音節感覚等の側面を軽視してきた感がある」ようである。しかし単音やアクセントが意味を表さないのに対して、イントネーションは意味を表すことがあることが既に指摘されており(川上1977; 服部1984; 杉藤1997)、コミュニケーションを重視した日本語教育を行っていく場合、イントネーション教育は必要不可欠なものであると思われる。そして、学習者側からも、自然なイントネーションで話すことへのニーズが高いことが報告されている(日本語教育学会:1991)。さらに、日本語音声の評価に与える影響を比べると、単音と韻律では韻律の影響力が単音の影響力を上回ることが報告されている(佐藤:1995)。このような現状を考えると、今後もイントネーシ

ョンの実態を解明すべく、多くの研究が行われていくことが望まれるだろう。

本稿では、コミュニケーションの際にイントネーションが問題となる場面として、依頼文を取り上げた。人に依頼をする際、話し手の立場が弱くなるケースが多々考えられる。もしイントネーションによって相手に不快感を与えるとすれば、最悪の場合はその依頼を断られてしまうかもしれない。このことから、イントネーション研究としてまず依頼文を取り上げるのは必然性があると考えた。

それでは、日本語教育で、依頼文のイントネーションはどのように扱われているのだろうか。依頼文を疑問文の一種であると考えて、以下に考察を試みる。

迫田他（1998：6）は日本語教育の現場で使用されている教科書の音声テープを分析した結果、「教科書の疑問文は全体的に典型的な「か」文が多く、上昇イントネーションが多い」と報告している。また、同じく1965年から1992年までに出版された日本語初級総合教科書20冊を調べた結果、「5冊に疑問文の韻律に関して、ある程度の記述はあったが、それ以外はまったく無いか一言触れる程度のことであり、日本国内で主に使用される教科書は多くの場合、記述が見られなかった」と言う（迫田他 1998：7）。つまり、学習者は教科書でイントネーションについて触れられることもないまま、音声テープをきいて疑問文であれば上昇イントネーションであると認識している可能性が高いといえよう。しかし、服部（1980）では、終助詞の「か」と上昇イントネーションは同じ意義を表すのではないことが指摘されているし、金田一（1967：108）^①では「『か』はその断定をくだしていいかどうか迷っている意味—つまり疑の意味を表し、上昇調のイントネーションは、「何か反応してくれ」という相手への誘い—つまり問いかけを表す」と言う。疑問文で使用される「か」と上昇イントネーションは必ずしも一緒に使われるわけではないのではないかという推測がなされる。

それでは、実際に日本語母語話者は、疑問文であれば必ず上昇イントネーションで発話しているのだろうか。また、学習者は本当に疑問文であれば上昇イントネーションであると認識しているのだろうか。本研究では日本語母語話者、韓国語母語話者、中国語母語話者を対象に典型的な依頼文である「ただいただけませんか」と「ただいただけませんか」の「か」のイントネーションの実態を明らかにする。

2. 研究課題

依頼文と言っても、様々な表現が考えられるわけであるが、今回は「ただいただけませ

んか」と「ていただけませんか」に限定する。実験に先立ち、大学で学ぶ留学生 22 名を対象に以下のようなアンケートを行った。「知らない人にどんな表現で依頼をするか」との問いの答えとして、「ていただく」という謙譲語を使った表現が多く、その中でも特に「ていただけませんか」という表現がいちばん多かったからである。また、「ていただけませんか」をより丁寧にする表現に「ていただけませんか」があるが、日本語母語話者は「ていただけませんか」と「ていただけませんか」の「か」のイントネーションが違う場合が多いということが自己内省的に推測される。また男女によってイントネーションに差がある可能性が、今田 (1998) により示されている。よって今回は、「ていただけませんか」と「ていただけませんか」の二つの表現を研究対象とし、そのイントネーションの実態を探るべく、以下の研究課題を設定した。

- (1) 日本語母語話者の「ていただけませんか」の「か」のイントネーションの実態はどうであろうか。また男女による差はあるのか。
- (2) 「ていただけませんか」の「か」のイントネーションは、日本語母語話者・中国語母語話者・韓国語母語話者で差があるだろうか。
- (3) 日本語母語話者の「ていただけませんか」の「か」のイントネーションの実態はどうであろうか。
- (4) 「ていただけませんか」の「か」のイントネーションは、日本語母語話者・中国語母語話者・韓国語母語話者で差があるだろうか。

3. 実験方法

3.1 スクリプトの作成

まず、「ていただけませんか」「ていただけませんか」のスクリプトを作成した。スクリプトはいずれも談話形式で、「ていただけませんか」「ていただけませんか」でそれぞれ 10 通りずつある。ここで 10 通りとしたのは、一人になるべく多くの発話をしてもらい偶然による結果になることを防ぐためである。スクリプトの場面設定は、事前に大学で学ぶ留学生 22 名にアンケートをとり、今まで日本で見知らぬ人に依頼をしたことのある場面はどのような場面であるのかを尋ねた。その中で留学生が見知らぬ日本人に依頼することの多い場面を 10 通り選び、筆者がスクリプトを作成した²⁾。

3.2 被験者

日本語母語話者…20 名 (男性 : 10 名、女性 : 10 名)

言語形成期に東京都内、および近郊で生まれ育った日本語母語話者を対象とした。なお、年齢は20代30代が中心で、男性女性それぞれ1名ずつ40代がいる。

韓国語母語話者…20名 {男性：10名 (KM01～KM10)、女性：10名 (KF01～KF10)}

現在東京都内、および近郊に滞在している日本語学習者を対象とした。日本語学習歴は2年以上で、日本語学校の上級クラスに在籍、または大学の研究生をしている。韓国語母語話者 KM01～10、KF01～10 の出身地域と日本滞在歴は表 1-1、1-2 のとおりである。

表 1-1 韓国語母語話者（男性）の各出身地域と日本滞在歴

	出身地域	日本滞在歴		出身地域	日本滞在歴
KM01	ソウル	7年2ヶ月	KM06	ソウル	1年7ヶ月
KM02	ソウル	1年7ヶ月	KM07	ソウル	2年
KM03	ソウル	3年8ヶ月	KM08	ソウル	8ヶ月
KM04	ソウル	1年8ヶ月	KM09	ソウル	1年4ヶ月
KM05	ソウル	1年9ヶ月	KM10	ソウル	1年

表 1-2 韓国語母語話者（女性）の各出身地域と日本滞在歴

	出身地域	日本滞在歴		出身地域	日本滞在歴
KF01	ソウル	2年	KF06	釜山	2年
KF02	ソウル	3年7ヶ月	KF07	ソウル	1年
KF03	不明	6年	KF08	ソウル	2年
KF04	ソウル	2年7ヶ月	KF09	釜山	2年
KF05	全州	1年	KF10	釜山	2年7ヶ月

中国語母語話者…20名 {男性：10名 (CM01～CM10)、女性：10名 (CF01～CF10)}

現在東京都内、および近郊に滞在している日本語学習者を対象とした。日本語学習歴は2年以上で、日本語学校の上級クラスに在籍、または大学の研究生をしている。中国語母語話者 CM01～10、CF01～10 の出身地域と日本滞在歴は表 1-3、1-4 のとおりである。

表 1-3 中国語母語話者（男性）の各出身地域と日本滞在歴

	出身地域	日本滞在歴		出身地域	日本滞在歴
CM01	北京	3年	CM06	北京	1年
CM02	北京	9ヶ月	CM07	北京	1年4ヶ月
CM03	北京	1年	CM08	上海	1年6ヶ月
CM04	北京	5年8ヶ月	CM09	関東	1年6ヶ月
CM05	北京	4年	CM10	関南	4年6ヶ月

表 1-4 中国語母語話者（女性）の各出身地域と日本滞在歴

	出身地域	日本滞在歴		出身地域	日本滞在歴
CF01	北京	1年	CF06	上海	1年4ヶ月
CF02	北京	2年7ヶ月	CF07	上海	3年6ヶ月
CF03	北京	5年	CF08	北京	1年7ヶ月
CF04	北京	1年	CF09	北京	1年
CF05	北京	1年	CF10	北京	1年7ヶ月

3.3 手続き

まず被験者に依頼表現である「ていただけませんか」と「ていただけませんか」を使ったスクリプトに十分に目をとおしてもらった。その際、スクリプトの内容に関してわかりにくいところは質問してもらい、十分に納得してもらったうえで録音を行った。学習者の場合は、一度練習してもらったあとに録音を行った。録音にはDAT、もしくは高性能マイクを使用したテープレコーダーを使用した。読み上げの際の注意点としては、(1) フィラー等は言ってもらってもよく、また(2) 言いにくい言葉があれば多少の変更を可能とした。これは、より感情を込めやすくし、単なる読み上げ調になるのをなるべく避けるためである。なお、会話の相手はすべて筆者が行い、20代の見知らぬ日本人女性を相手に依頼するとして、読んでもらうようにした。実験は、1999年7月～11月の間に実施した。実験状況は、録音に適した静かな環境で実施した。

3.4 分析

DAT や高性能マイクを使用したテープレコーダーに録音した被験者の発話を汎用パソコン用音声解析ソフト「音声録聞見」(今川・桐谷, 1989)⁹⁾にかけ、上昇・非上昇・無声化に分類した。なお、上昇・非上昇といっても音声学的には様々な下位分類が考えられる。例えば、国立国語研究所(1963:185-6)によると、「理論上は、『上昇調』『平調』『下降調』の3種の区別があると、もっとも都合がよさそうだが、『上昇調』と『非上昇調』の

『非上昇調』を代表し、『上昇調』との対立的な意味で『下降調』と称す」とある。したがって、音声学的には様々な下位分類が考えられるが、「上昇調」と「下降調」の2つのカテゴリーに分けることは有意義であると思われる。また、諸論考では「非上昇調」を代表させて「下降調」という名称を用いているものが多いようであるが、「非上昇調」と「下降調」を同じカテゴリーに分類し、本研究では「非上昇イントネーション」という名称を用いることとする。また、今田（1998）における一連の研究では、上昇・非上昇イントネーションの他に「無声化」というカテゴリーを設けている。無声化とは、「音の高さがないわけであるので、上昇であるとも非上昇であるとも判断ができない」音調を指す。よって、本研究で区別するイントネーションカテゴリーを、上昇イントネーション・非上昇イントネーション・無声化の3種とし、これ以降に示すの結果や考察では、無声化されたものは数値に含めないこととする。なお、カテゴリー分類の判定は筆者が録聞見による視覚と聴覚で行い、判定に迷ったものは日本語母語話者に判定を依頼した。その際意見が分かれたもの、どちらとも判断できないものは判定不可能としてデータ対象としなかった。

4. 実験結果と考察

4.1 研究課題(1) 日本語母語話者の「ていただけませんか」の「か」のイントネーションの実態はどうであろうか。また男女による差はあるのか。

表2は日本語母語話者の「ていただけませんか」全10文の「か」のイントネーションの上昇数と非上昇数を男女別に平均と標準偏差（SD）で表したものである。

表2 日本語母語話者の「ていただけませんか」の上昇数・非上昇数

上昇、非上昇	平均 (SD)	
	女性	男性
上昇数	9.70 (0.67)	4.70 (3.67)
非上昇数	0.30 (0.67)	4.90 (3.67)

「ていただけませんか」の「か」の上昇数と非上昇数に関して、同じ母語話者であっても男女で平均の差があるのかを調べるために、t検定を行った。その結果、上昇数、非上昇数ともに、男女の平均の差に1%水準で有意差が見られた（順に $t(28) = 4.29$, $t(28) = 3.90$ $p < .01$ ）。日本語母語話者の「ていただけませんか」の「か」においては、男性より女性のほうが上昇が多く、非上昇が少ないことがわかった。韓国語母語話者と中国語母

話者においては、上昇数・非上昇数のどちらにおいても男女で有意差は見られなかった。

井出 (1982 : 156) は、「日本語のイントネーションの男女差に関する研究はいまだされていないが、一般に下降調の断定的イントネーションより、尻上がりの方が女らしく聞こえるということが内省的直観で認められる。」としている。さらに、同じく依頼文を使用した聴覚印象実験を行った小池 (2000) では、日本語母語話者は非上昇より上昇のほうが女性的であると感じることを明らかにしている。

4.2 研究課題(2) 「ていただけませんか」の「か」のイントネーションは、日本語母語話者・中国語母語話者・韓国語母語話者で差があるだろうか。

表3は「ていただけませんか」の「か」のイントネーションの上昇数と非上昇数を国籍別に平均と標準偏差 (SD) で表したものである。

表3 「ていただけませんか」の上昇数・非上昇数 (国籍別)

国籍	上昇・非上昇数	上昇イントネーション	非上昇イントネーション
		平均 (SD)	平均 (SD)
日本語母語話者		7.20 (3.61)	2.60 (3.49)
韓国語母語話者		7.40 (3.59)	2.45 (3.55)
中国語母語話者		2.90 (3.39)	6.80 (3.35)

表3の「ていただけませんか」における「か」の上昇数と非上昇数を、それぞれ一変量の分散分析を使い、日本語母語話者と韓国語母語話者と中国語母語話者で比較した。その結果、上昇数・非上昇数ともに1%水準で差が見られた (それぞれ $F(2,57)=10.38 p<.01$, $F(2,57)=10.18 p<.01$) ので、どこに差があるのかを見るために、Scheffeの多重比較をおこなった。その結果、上昇数・非上昇数のどちらにおいても、日本語母語話者と中国語母語話者の間、韓国語母語話者と中国語母語話者の間に1%水準で差が見られた。日本語母語話者と韓国語母語話者の間では有意差が見られなかった。

以上から、「ていただけませんか」の「か」の上昇数においては日本語母語話者と韓国語母語話者が類似しており、中国語母語話者は極めて少ないことがわかった。また、非上昇数においても、日本語母語話者、韓国語母語話者が類似しており、中国語母語話者は極めて多いことがわかった。冒頭で述べたように日本語の教科書の音声テープでは上昇イントネーションが多いため、学習者が音声テープをきいて疑問文であれば上昇イントネーションであると認識しているのではないかとこのことを予測していたが、中国語母語話者に

関してはそうとは言えないことがわかった。中国語母語話者に見られる上昇イントネーションが少なく、非上昇イントネーションが多いという傾向は興味深いところである。福岡(1998)は、北京語、上海語、東語(福州)、南語(台湾)の疑問文のイントネーションについて調べた結果、いずれの疑問文にも日本語のような1オクターブ近く急上昇するピッチ曲線は見られないことを指摘している。中国語のこのような特徴が、今回中国語母語話者に非上昇イントネーションが多いことに関係しているのではないかと、ということが予測される。実際、なぜ「ていただけませんか」の「か」を非上昇イントネーションで発話したのかを、非上昇イントネーションで発話することの多かった CF07 に尋ねたところ、「日本人のまねをしようと思って非上昇にした。でも、母語の中国語では疑問文でもあまり上昇にしないのでその影響かもしれない」と答えた。また同じく非上昇イントネーションで発話することの多かった CM09 は、「(イントネーションのことは)あまり気にしていないが、中国語だと上昇イントネーションのほうがきつく、押し付けがましい感じがする。相手に助けてもらうのだから、非上昇イントネーションのほうがやわらかい印象がいい」と答えた。兩人とも、母語の影響の可能性があると自己分析している。

4.3 研究課題(3)母語話者の「ていただけませんか」の「か」のイントネーションの実態はどうであろうか。

日本語母語話者は、「ていただけませんか」の「か」において全員が非上昇イントネーションであり、例外がなかった。今田(1998)によると、あるテレビ番組を分析した結果、文末表現の「でしょうか、ましようか」等は上昇調も可能だが、非上昇調のほうが丁寧な感じになるとしている。今回の実験のような見知らぬ人への依頼では、依頼者は極力丁寧に発話することが考えられる。そこで今回の被験者は、全員が非上昇で発話したということが言えるだろう。

4.4 研究課題(4)「ていただけませんか」の「か」のイントネーションは、日本語母語話者・中国語母語話者・韓国語母語話者で差があるだろうか。

表4は「ていただけませんか」の「か」のイントネーションの上昇数と非上昇数を国籍別に平均と標準偏差で表したものである。

表4 「ていただけませんか」の上昇数・非上昇数（国籍別）

国籍	上昇・非上昇数	上昇イントネーション	非上昇イントネーション
		平均 (SD)	平均 (SD)
日本語母語話者		0.00 (0.00)	9.50 (1.61)
韓国語母語話者		2.65 (3.70)	7.10 (3.67)
中国語母語話者		0.50 (1.19)	9.00 (1.69)

次に、「ていただけませんか」の「か」の上昇数、非上昇数を、分散分析を使い、日本語母語話者と韓国語母語話者と中国語母語話者で比較した。その結果、上昇数・非上昇数ともに1%水準で差が見られた(それぞれ $F(2,57)=7.86$ $p<.01$, $F(2,57)=5.10$ $p<.01$)ので、どこに差があるのかを見るために、Scheffeの多重比較をおこなった。その結果、上昇数においては日本語母語話者と韓国語母語話者の間は1%水準で、韓国語母語話者と中国語母語話者の間は5%水準で差が見られた。日本語母語話者と中国語母語話者の間には差が見られなかった。また、非上昇数でも、日本語母語話者と韓国語母語話者の間は5%水準で差が見られ、韓国語母語話者と中国語母語話者の間は10%水準で有意な傾向が見られた。日本語母語話者と中国語母語話者の間には差が見られなかった。

以上から、「ていただけませんか」の「か」の上昇数においては日本語母語話者と中国語母語話者が類似しており、それに比べると韓国語母語話者が多いことがわかった。また、非上昇数においても日本語母語話者と中国語母語話者が類似しており、それに比べると韓国語母語話者が少ないことがわかった。韓国語母語話者は、「ていただけませんか」においても上昇数が多く、非上昇数が少ないことは既に示されているとおりである。つまり、一般的に韓国語母語話者には上昇イントネーションが多く、非上昇イントネーションが少ないということが言える。

大坪 (1987: 114) は、「韓国語話者の発話では日本語の句末の上昇調のイントネーションが必要以上に上がる傾向がある」としている。韓国語母語話者のこのような特徴が、今回の結果にもあらわれたのではないかということが予測される。実際、「ていただけませんか」を上昇イントネーションで発話していたKM08に、なぜ上昇イントネーションで発話したのかを尋ねたところ、「韓国語では、『ていただけませんか』も『ていただけませんか』も同じ上昇イントネーションである。だから日本語でも『ていただけませんか』を上昇イントネーションで発話した」と答えた。また、同じくKF02も、「母語の影響であると思う」と答えた。

5. まとめと今後の課題

以上の結果をまとめると、まず日本語母語話者の「ていただけませんか」の「か」のイントネーションには、上昇イントネーションと非上昇イントネーションがあり、非上昇イントネーションは男性に多いことがわかった。迫田他（1998：6）では、日本語教育の現場で使用されている教科書の音声テープを分析した結果、「教科書の疑問文は全体的に典型的な「か」文が多く、上昇イントネーションが多い」ことが報告されているが、実際には非上昇イントネーションで発話されることも有り得るし、またそれは男性に多いのである。日本語教育で今後どう扱っていくかは問題である。また、日本語母語話者・中国語母語話者・韓国語母語話者と比較してみると、中国語母語話者は男女とも非上昇イントネーションが多く、母語に影響されている可能性があることわかった。小池（2000）では、非上昇イントネーションは高圧的であり、丁寧でない印象を与えることが示されているが、日本語教育の観点からすると、中国語母語話者に非上昇イントネーションが多く見られることは、聞き手に不快感を与えることにつながる危険性がある。小池（2000）では上昇イントネーションは女性らしく聞こえるという結果が報告されていることから、日本語母語話者の男性には非上昇イントネーションが多く、女性には上昇イントネーションが多いということも考慮に入れたうえで、指導を行っていくべきであろう。次に、「ていただけませんか」の「か」のイントネーションであるが、日本語母語話者は全員が非上昇イントネーションで発話していた。今田（1998）では、「でしょうか」「ましょうか」は非上昇イントネーションのほうが丁寧な印象を与えることが報告されており、よって見知らぬ人への依頼として、母語話者は全員非上昇イントネーションを用いたと言えよう。しかし、日本語母語話者・中国語母語話者・韓国語母語話者を比較した場合、韓国語母語話者は「ていただけませんか」の「か」のイントネーションを上昇で発話する機会が多かった。これも母語の影響が考えられるが、必要以上に上昇イントネーションで発話したことによって、何か押し付けがましい印象、またはきつい印象を与えるとすれば、それは問題である。

今回は中国語母語話者・韓国語母語話者の出身地域が一定でなく、また滞在年数も様々であったため、今回の結果を一般化することはできないだろうが、本研究を基礎研究と位置づけ、今後の日本語教育でイントネーション指導をどう行っていくべきか、検討していきたいと思う。

注

- (1) 初出は昭和26年2月『国語学』第5巻。
- (2) 以下に実際使用したスクリプトの例を示す。なお、被験者にはAを読んでもらい、筆者はBを読んだ。

スクリプト2

あなたは今ある情報をメモしたいと思っていますが、書くものがありません。隣でメモをしている見知らぬ人にペンを借りてください。

A: すみません。

B: はい。

A: あの、ちょっとペンを貸していただけませんか。

A: すみません。

B: はい。

A: あの、ちょっとペンを貸していただけませんかでしょうか。

スクリプト5

あなたは今図書館でパソコンを使っています。印刷をしようと思つていますが、どうしてもできません。図書館の係の人は忙しそうなので、隣でコンピューターを使っている見知らぬ人に操作方法をきいてみてください。

A: すみません。

B: はい。

A: あの、これ印刷しようと思つたんですが、どうしてもできないんですね。

B: あっ、はい。

A: あの、どうやったらいいのか、教えていただけませんか。

A: すみません。

B: はい。

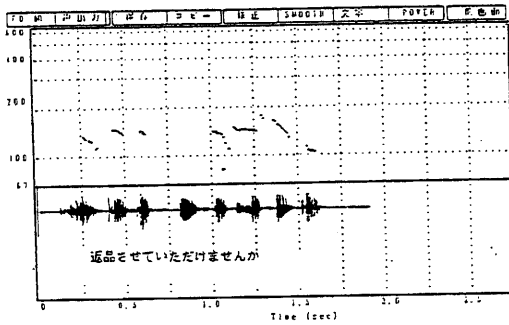
A: あの、これ印刷しようと思つたんですが、どうしてもできないんですね。

B: あっ、はい。

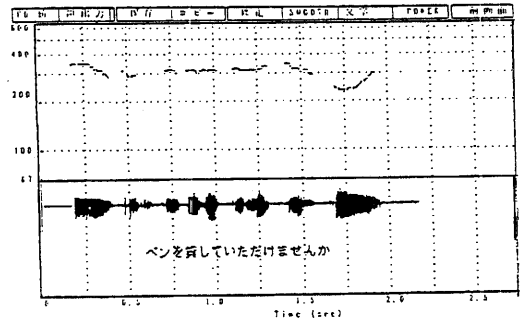
A: あの、どうやったらいいのか、教えていただけませんかでしょうか。

(3)以下に録聞見の結果の代表的なものを示す。

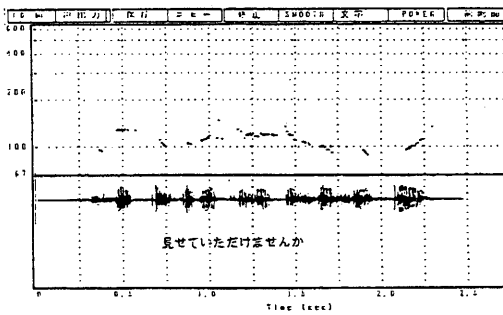
「ていただけませんか」



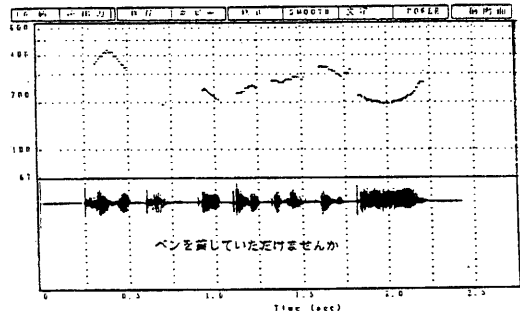
日本人男性・非上鼻例



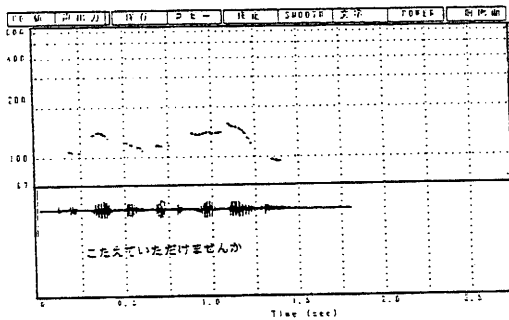
日本人女性・上鼻例



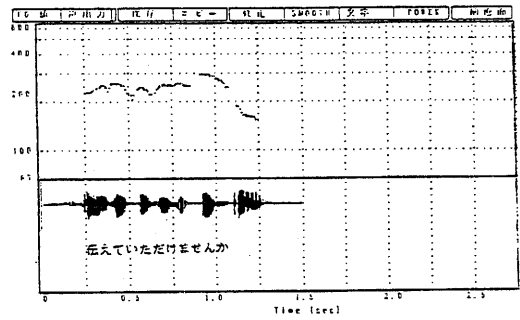
韓国人男性・上鼻例



韓国人女性・上鼻例

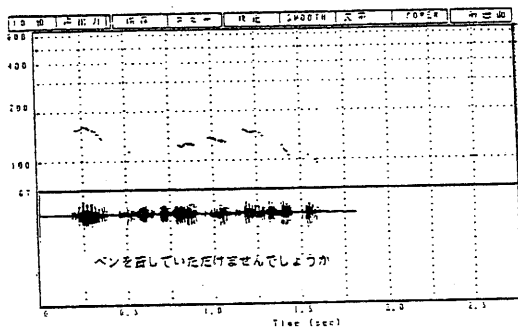


中国人男性・非上鼻例

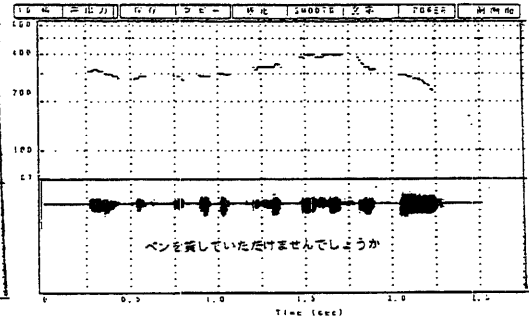


中国人女性・非上鼻例

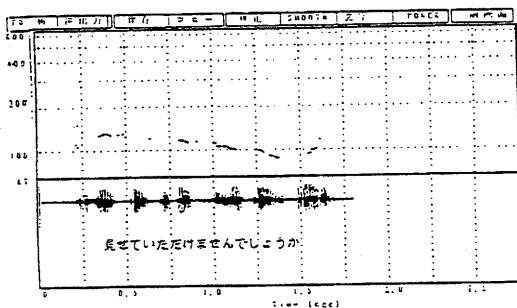
「ていただけませんか」



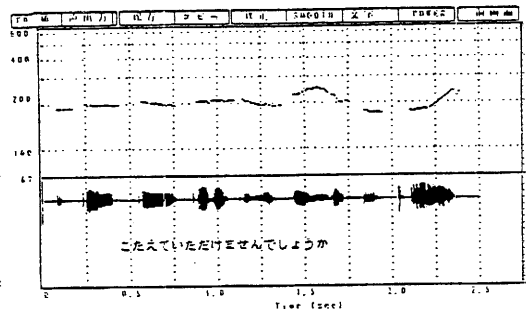
日本人男性・非上昇例



日本人女性・非上昇例



韓国人男性・上昇例



韓国人女性・上昇例

参考文献

- (1) 井出祥子 (1982) 「待遇表現と男女差の比較」『日英語比較講座第5巻 文化と社会』大修館書店
- (2) 今川博・桐谷滋 (1989) 「DSP を用いたピッチ、フォルマント実時間抽出とその発音訓練への応用」『電子情報通信学会技術報告』
- (3) 今田滋子 (1998) 「初級日本語教科書における談話展開の文末韻律型—『日本語(にほんご/こっぽんご)』の会話テープ分析を中心に—」『地域の日本語教育活性化のための談話音声の研究』平成8・10年度 文部省科学研究費補助金基盤研究 B (2) 研究成果報告書
- (4) 大坪一夫監修 (1987) 『NAFL 日本語教師養成通信講座 D-2 日本語の音声2』アルク
- (5) 川上泰 (1977) 『日本語音声概説』桜楓社
- (6) 金田一春彦 (1967) 『日本語音韻の研究』東京堂出版
- (7) 串田真知子・城生伯太郎・築地伸美・松崎寛・劉銘傑 (1995) 「自然な日本語音声

への効果的なアプローチ：プロソディーグラフー中国人学習者のための音声教育教材の開発ー」『日本語教育』85号 日本語教育学会

- (8) 小池圭美 (2000) 『依頼文における終助詞「か」のイントネーション』お茶の水女子大学大学院修士論文
- (9) 国立国語研究所 (1963) 『話し言葉の文型 (2) ー独話資料による研究ー』集英出版
- (10) 迫田久美子・長岡順子・山中庸子・熊野七絵 (1998) 「日本語初級教科書の付属会話テープの疑問文末イントネーション」『地域の日本語教育活性化のための談話音声の研究』平成8・10年度 文部省科学研究費補助金基盤研究 B (2) 研究成果報告書
- (11) 佐藤友則 (1995) 「単音と韻律が日本語音声の評価に与える影響力の比較」『世界の日本語教育 5』
- (12) 杉藤美代子 (1997) 「話し言葉のアクセント、イントネーション、リズムとポーズ」『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂
- (13) 服部四郎 (1980) 『日本の言語学』第1巻
- (14) 服部四郎 (1984) 『音声学』岩波書店
- (15) 福岡昌子 (1998) 『中国人学習者の日本語音声の習得及びその指導に関する研究ー破裂音とイントネーションを中心としてー』お茶の水女子大学大学院博士論文
- (16) 日本語教育学会 (1991) 『日本語教育機関におけるコース・デザイン』凡人社

(お茶の水女子大学大学院)

The intonation of the particle 'ka' of request sentences

KOIKE, Tamami

This paper reports research designed to measure native and non-native speakers' intonation of *ka* in the grammatical structures of '*teitadakemasenka*' and '*teitadakemasendesyouka*'. Japanese, Chinese and Korean (10 males and 10 females per nationality) were asked to read aloud a paragraph which was recorded and analyzed using phonetic analysis software, '*Onseirokubenkem*'. The analysis of the first structure yielded 1) a gender difference in Japanese subjects, where female subjects spoke 'ka' with a rising intonation and males with flat intonation, 2) Chinese subjects also produced flat intonation, and in contrast Korean subjects produced a rising intonation. The analysis of the second structure reveals that 3) Japanese spoke the sentence ending 'ka' with a flat intonation, 4) where as the non-native speakers produced similar intonation patterns to the first structure.

(Graduate school, Ochanomizu University)